

街づくりとアクセシビリティ

1. 街並み

コペンハーゲンの市街地は至る所に歴史的建造物が建ち並んでいる。旧証券取引所、市庁舎等、その佇まいは中世の時代を感じさせる歴史性のある街並みである。デンマーク議会もその一つであり、その建物は1918年に改築された中世のクリスチャンボー城を使用している。



デンマーク議会（クリスチャンボー）

街の中心地はヨーロッパ諸国では共通する小石を敷き詰めた路面である。市内の道路は車道と自転車道そして歩道の3つに



車道、自転車道、歩道に分離

区分けされている。この背景にはデンマークは自転車大国と呼ばれるほどの自転車社会であり、その市民生活に密着した街づくりがなされている。

2. バリアフリー度

(歩行者道路)

街中の歩行者道路は煉瓦や小石の石畳で舗装されている。凹凸のある路面は車いすユーザーには大きなバリアであるが、その歩道には車いすだけではなく、ベビーカーも通行しやすいよう通行帯がつくられている。横断歩道では、車道と歩道との境をコンクリートで盛り、段差を解消してある。粗雑なものであり日本とは大きく異なる。



左：横断歩道の段差解消コンクリート舗装。右：通行帯敷設

歩道には店舗の看板、電信柱、歩道上の自転車など一切見

当たらず、通行の妨げになるものはない。日本では歩道であるにもかかわらず様々な障害物が置かれており、雑多な歩道の日本と、歩行者への配慮を徹底しているデンマークの歩道との違いを痛感する。

社会保障制度の整備されたデンマークも、ことバリアフリーに関してはまだまだ不十分な感が否めない。歴史的な佇まいとバリアフリーのまちづくりの調和を考えるとその課題克服には多くの知恵と時間を必要とする。

(点字誘導ブロック)

街中で点字誘導ブロックを見かけることは少なく、鉄道の駅構内や一区画の歩道上の一部での敷設である。日常生活での主要施設を結ぶものにはなっておらず、点字誘導ブロックはあまり普及していないように思える。

日本では「福祉のまちづくり条例」、「バリアフリー新法」に拠って当たり前になっている点字での表示もエレベーターの表示版、鉄道駅舎内での切符自動販売機などでは点字の説明板を目にすることができなかった。

なぜ、そうなのかは現時点でその理由は見いだせないが、それを必要としない対応がなされているのではないかと思える。



左：駅構内の点字誘導ブロック。右：歩道上の点字誘導ブロック

(ピクトグラム)

コペンハーゲン市内の至るところで絵文字や単純化した記号が表示用に使用されている。これはすべての人に共通するコミュニケーションのツールとして国際的に研究が進められているものである。その国の言語・文字表記が理解できなくても、絵文字として表記すれば知的障害の当事者だけではなく、海外の渡航者にも有効なコミュニケーションの手立てとなりうるのである。街中の至るところで、ピクトグラムが活躍している。



ピクトグラム（絵文字）での表示